



 interview

サン・マイクロシステムズ
Java Software プレジデント

D r . A l a n B a r a t z

アラン・バラッツ

「ポータル」によって「エンターテインメント」 根本的な変革がもたらされる。

AOLとの合同によるネットスケープの買収、ホームネットワークの標準仕様「OSG (Open Service Gateway) 策定への動き、NTTドコモとの提携、アプリケーションサーバー「NetDynamics 5」とローミング環境を実現する「iPlanet」の発表、ポータルコンピューティングを支援する「Service Provider.com」の提供と、この数か月の間にサン・マイクロシステムズから出されたリリースは膨大な数に上る。その内容も、インターネットのさらなる進化を予想させるものばかりである。サン・マイクロシステムズのJava Softwareプレジデントであるアラン・パラッツ氏に、同社の戦略と、新たなフェーズを迎ええたJavaテクノロジーについて聞いた。

聞き手: インターネットマガジン編集部
Photo: Nakamura Tohru

🗣️: 現在、米国に4000万人、日本には1500万人程度のインターネットユーザーがいると言われています。そして今後、このマーケットをさらに大きく広げるための努力を各企業がすることになるでしょう。このような時代に、インターネットにおいてサンはどのような役割を果たすのでしょうか。

パラッツ: いまこの時期に、私たちがこの業界で仕事をしているのはとてもエキサイティングであり、興味深いと思います。

インターネットやそこから生まれたテクノロジーが、ビジネスの分野でも「コンシューマー」の分野でも「エンターテインメント」自体を根本的に変え始めているからです。そして、この変革を一言でまとめると、「ポータル」という言葉に集約できます。

ポータルはヤフーに代表されるような形で、コンシューマー指向かつインターネット指向の発想で情報にアクセスできるというところから始まっています。さらに昨年からは、単に情報にアクセスできるだけでなく、電子メールのようなアプリケーションの機能も取り込むようになりました。

現在、さきほどおっしゃったように何百万人、何千万人という消費者がインターネットやポータルを活用しながら、情報にアクセスしています。あるいは、日常のニーズであるコンシューマー向けのコミュニケーションのサービス、たとえば電子メールやエレクトロニックコマースといったものを、ポータルを通して使うようになりました。物を買ったり、旅行の予約をしたり、銀行の取引をしたりといったことも、すでに始ま

っています。

さらに現在は、ポータルがコンシューマーだけでなく、ビジネスのコンピューティング環境の中にも浸透し始めていると思います。すでに多くの企業では、社員や顧客、サプライヤーにポータルを提供しています。サンでも同様に社員に対してポータルを提供しています。ウェブベースの環境でURLを介してビジネス情報にアクセスしたり、電子メールやオンラインカレンダーやディレクトリーサービスなどを統合しながら、出張経費の計上をしたりしています。

つまりポータルというのは、ウェブのフロントエンドになるブラウザと、企業の持っているシステムやサービスといったバックエンドの部分を統合するソリューションであると考えられるわけです。もっとわかりやすく言うならば、フロントエンドとバックエンドをノリ付けするような役割を持つのです。

そうなると、ノリの役割をする製品、つまりフロントエンドのブラウザやウェブと、バックエンドのシステムやサービスを提供する部分をつなぎ合わせるものが必要になってきます。その1つが、サンが提供する「アプリケーションサーバー」なのです。

🗣️: ポータルコンピューティングやアプリケーションサーバーというキーワードが出てきた時代のJavaの役割とはどのようなものになるのでしょうか。

パラッツ: Javaテクノロジーはポータルベースのコンピューティングに関して、2つの意

味で非常に重要な役割を果たします。1つはクライアント上で、そしてもう1つはサーバー上においてです。

クライアント上でJavaテクノロジーは、ウェブページを介してエンドユーザーにアプリケーションの機能を提供するために使われます。そしてまた、ウェブのハイパーリンクとの組み合わせによって、アクセスをより組織立てて、系統立てていくことができるテクノロジーとも言えます。

次にサーバー側ですが、ここでのJavaとは、新しいビジネスロジックをアプリケーションサーバー上で使うためのプログラミング環境という役割を果たしています。

新しいポータルベースのコンピューティングモデルでは、消費者や社員やサプライヤーといったエンドユーザーが、ポータルのウェブにURLでアクセスし、ウェブページの機能とJavaの機能とを組み合わせること

によって、さまざまなトランザクションをウェブサーバーに戻します。そして、そのトランザクションがウェブサーバーからアプリケーションに行き、次にアプリケーションサーバーがJavaのビジネスロジックを呼び出し、必要な処理を行います。このように、新しいポータルベースのコンピューティングモデルにおいて、Javaテクノロジーは企業向けから消費者向けまで、クライアント/サーバー上で非常に重要な役割を果たすようになります。

☞ : サンはJiniの発表以来、「iPlanet」というローミングテクノロジーや「パーソナルブラウザ」、さらにはNTTドコモとの提携、OSGを通じたホームネットワークの標準化への動きなど、非PCにフォーカスしたりリリースを次々と打ち出しています。これらのソリューションによって、情報家電や携帯電話から個人情報にアクセスしたり電子商取引をしたりするような時代がもうすぐ実現すると考えていいのでしょうか。

バラツツ: まもなくそうなります。

さきほど申し上げましたように、ポータルがこれからの主流の環境になって、消費者やビジネスユーザーがこのコンピューティングのテクノロジーを活用できるようになっていくと思っています。サンとしても完全なソフトウェアやハードウェア

のソリューションを提供することによって、ビジネスユーザーやサービスプロバイダーがさらなる顧客や社員、サプライヤーといった人に対してポータルベースのコンピューティングサービスが提供できるようにしたいと思っています。

サンはすべてのソフトウェア、そしてハードウェアがポータルベースのコンピューティングに対応していくというところにフォーカスを当てています。具体的にどのような製品かという、ブラウザ、それからウェブサーバー、アプリケーションサーバー、ディレクトリーサーバー、メールサーバー、ワークフローエンジン、カレンダーサーバーと、さまざまです。さらに重要なのは、それぞれのソフトウェアのベースとなるミッションクリティカルな基幹業務系のOSということになります。

Javaテクノロジーは、クライアント/サーバー上でこのようなソリューションにとっての重要なエレメント(要素) コンポーネントとなります。さらに、このポータルをモバイルのビジネスユーザーやモバイルの消費者に拡張していき、そして情報家電に広げていくために、小さな(フットプリント) OSと小さな(フットプリント) Javaの実装、またNTTドコモのiモードの電話機といったところで必要となるようなソフトウェアが求められてくるわけです。このようなソフトウェアのプラットフォームの

コアになるサンの製品、たとえばSolarisやJavaプラットフォームが完全なソリューションのコンポーネントとなります。

また、AOLやネットスケープとのアライアンスによって、全体のソリューションにおけるミドルウェアのプロダクトも生まれました。さらに、コンシューマーエンベデッドソフトウェアの製品としては、Javaプラットフォーム用の小さなメモリーで動くリアルタイムOSや小さなメモリーで動くアプリケーションがあります。あるいは、電子メールやカレンダーといったアプリケーションもこれから出てくるわけです。このような製品によって、ポータルをさらにモバイルのユーザーや情報家電に拡大していくことになるでしょう。

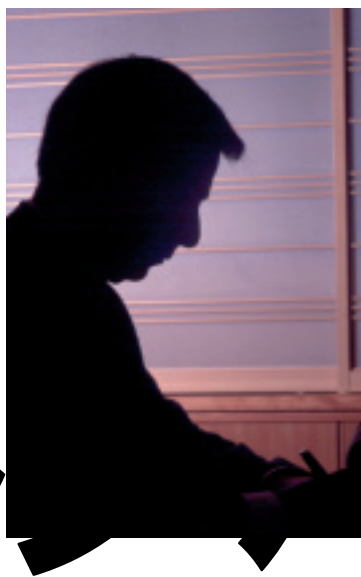
おっしゃるようないろいろなイニシアティブが発表されていますが、たとえばJava2プラットフォームやSolaris7とか、AOLやネットスケープとのアライアンス、NTTドコモとの提携やOSGなどのさまざまな発表は、すべてポータルのエンドツーエンドのソリューションを提供するためのコンポーネントになっているということです。

ですから現在のサンという企業は、インターネットにおいてポータルを実現するための原動力であると思っています。

☞ : 乱暴な言い方をすると、今後PCは必要ない時代になるのでしょうか。バックエンドにSolarisがあり、フロントエンドに家電のような誰にでも使えるデバイスあれば、それだけで完結するようなコンピュータワールドがJavaのおかげでできると考えていいのでしょうか。

バラツツ: 私はPCが必要でないとは言いません。逆に、PCは今後もネットワークに対しての1つの重要なウィンドウになり続けると思います。ただし、数あるウィンドウの中の1つという位置付けです。

もちろん、私たちのゴールにはさまざまなアクセスのためのデバイスがあります。これから登場する新しい家電を市場に導入することによって、インフォメーションアライアンス(情報家電) iモードのような携帯電話、セットトップボックス、またはウェブ



インターネットマガジン

フォンのようなものも含めて、それらのすべてをデバイスとしてユーザーに使ってもらえるようにしたいと考えます。しかも、一貫性を持った形で、あるいは均斉のとれた形で、情報に対してアクセスができるようにしたいというのが私たちゴールなのです。

しかしそれはあくまでも、コンシューマーやビジネスユーザーなど、エンドユーザーのコンピューティングを考えたうえで、こうしたデバイスがポータルに対してのウィンドウになり得るようにするという事です。ポータルこそが、これからユーザーの体験にとって重要なポイントになっていくでしょう。大切なのはデバイスではないということです。ブラウザだとか細かいデバイスの部分だとかは、これから重要性を薄めていって、その反対にポータルがますます重要性を強めていくと思います。

「ポストPCエラ」という言葉を聞きますが、こうしたPC以降の時代というのは今までPCだけに当たっていたフォーカスが、今度はポータルに移行していくと思っています。その瞬間にみんなが持っているどんなデバイスを介してもポータルに入っていけるという時代に移行すると私は予想しています。

☎：サンが提唱するポータルは、ネットスケープが作った「ネットセンター」のコンセプトに近いように思います。さらに、ポータルコンピューティングによって実現する世界は、やはりネットスケープが提唱した「ネットエコノミー」に近いと言ってもいいのではないのでしょうか。そして、これらの戦略には、もう1つ、企業やサービスプロバイダーなど、ポータルを提供する側にも十分なソリューションを提供する「エンタープライズサービスプロバイダー」という発想があったと思います。

バラッツ：確かにコンシューマーの環境の中では、サービスプロバイダーがポータルコンピューティングの環境なり、ソリューションの中で、非常に重要なコンポーネントになると思います。

企業の環境においては、企業自身が自分でポータルを構築して社員にサービスを提

供する方法も選べますが、アウトソーシングして、ポータルの提供という部分は別のプロバイダーにまかせる方法もあります。

一方で、サービスプロバイダーはバズルの重要なピースになります。またサンはそうしたサービスプロバイダーをサポートするためのイニシアティブである「Service Provider.com」をすでに発表しています。

おっしゃるとおりですが、この先、ポータルは非常に重要な概念となり、次の段階としてネットベースの「ネットエコノミー」への重要な概念につながっていくと思います。サンにとってもこれらは非常に大切な概念であり、これからはさらに促進していきたいと思っています。

☎：ポータルやネットエコノミーに加えて、今後は放送とインターネットが統合され、ネットワーク自体もさらに高速化することになるでしょう。そうすると、巨大なデータを保存しておくための「ストレージ」がインターネットの世界でもっとも重要な分野の1つになるはず。サンはすでに、この分野で多くのアドバンテージを持っています。これによって次世代のインターネットビジネスを有利に展開できると考えます。

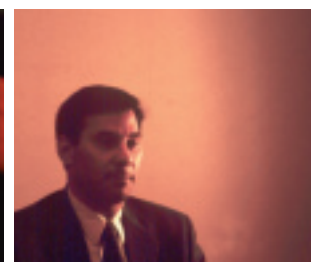
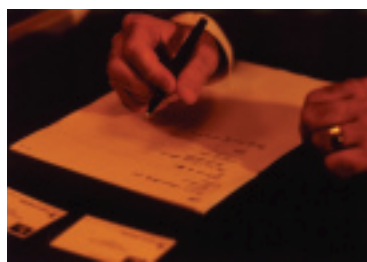
バラッツ：まさにおっしゃるとおりです。ストレージというのは、ネットエコノミーの重

要な部分です。これは、いままでのような伝統的なストレージモデルではなく、ネットワークベースのストレージという形になります。情報をネット上で「インテリジェントなストレージデバイス」を用いて蓄えておく。これによって、ネットにつながっているエンドユーザーがいつでも、そして迅速に情報を手に入れることができるものです。

今後、ネットワークにおいてはさらに多くの情報やアプリケーションを蓄積するようになるでしょう。この意味で、サンもストレージのアーキテクチャーという観点から言えば、これからインテリジェントなネットワークベースのストレージを導き出していくことにフォーカスを当て、効率よく、ネットワークのどこからでも情報やアプリケーションにアクセスできるようにしたいと思っています。

ストレージに加えて、もう1つ重要なテクノロジーがあります。それはディレクトリーサービス、特にホームネットワークベースのディレクトリーサービスです。情報やネットワークリソースは簡単に見つけられなければ価値はありません。ですから、サンはストレージに加えてディレクトリーサービスを、フォーカスを当てるべきもう1つの分野として捉えています。

☎：ありがとうございました。 ●●



アラン・バラッツ

サン・マイクロシステムズ Java Software プレジデント

Java Software プラットフォームの開発、マーケティング、サポート部門を担当。サンに入社する以前は、Delphiのプレジデント兼CEOを務めた。マサチューセッツ工科大学において、エレクトリックエンジニアリングとコンピューターサイエンスの博士号を取得。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社**インプレスR&D**

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp